県営圃場整備事業（春富地区）

——緊急発掘調査報告——

小御堂遺跡

1977

伊那市教育委員会

南信土地改良事務所

県営圃場整備事業（春富地区）

——緊急発掘調査報告——

小御堂遺跡

1977

伊那市教育委員会

南信土地改良事務所

序

近年，各地区で，埋蔵文化財，あるいは石造文化財等を含めた文化財保護思想の高揚が強く叫ばれるような傾向になってきた。このような動向のなかで我が郷土伊那市に於いても，文化財に関す報告書を刊行してまいりました。ここ数年来の傾向として伊那地区にも開発の波が押し寄せてきました。なかでも，その著しいものは農業構造改善事業であります。そのことによって埋蔵文化財の危機が生じてまいりました。本来ならば埋蔵しておくのが最ものぞましい姿でありますが，社会状況に対処するうえに記録保存という措置をとってまいりました。

ここに，報告する小御堂遺跡は春富土地改良圃場整備事業地区に該当したので，事業にかかる前に調査を実施しました。その成果については，報告書の中に述べられていますが，時間的な都合により充分なる検討ができなかったことは誠に残念に思います。

調査に当っては，仮換地という型がとられたために，地元，土地改良区役員の理解を得なければ調査は不可能であったが，数人の役員の方からこころよく全面的な協力を得ることができたので，調査団長に友野良一先生をお願いして調査にとりかかりました。

発掘調査は7月下旬から9月上旬にわたって行なわれました。時期が夏だっただけに連日暑さに悩まされたが，ここに調査報告書が発刊されたことは誠に喜ばしい次第であります。

最後に，快よく御指導頂いた県教育委員会，並びに南信土地改良事務所，連日熱心に調査に当られた調査員，作業員の皆様等に対し深甚なる感謝の意を表する次第であります。

昭和52年3月10日

伊那市教育委員会

教育長　伊沢一雄

凡　　例

1．　今回の発掘調査は県営圃場整備に伴なう，土地改良事業で，第１次緊急発掘調査にもとづく報告書とする。

2．　この調査は，県営圃場整備土地改良事業に伴なう緊急発掘で，国・県・市の補助金のもとに，事業は長野県南信土地改良事務所の委託により，伊那市教育委員会が実施した。

3．　本調査は，昭和51年中度に業務を終了する義務があるため，報告書は図版を主体とし，文章記述もできるだけ簡略にし，資料の再検討は，後日の機会にゆずることにした。

4．　本文執筆者は，次のとおりである。担当した項目の末尾に氏名を記した。

小池政美，田畑辰雄

◎図版作製者

○遺構および地形

友野良一，小池政美，田畑辰雄，荻原　茂

◎土器実測図

田畑辰雄

◎写真撮影

○発掘及び遺構

友野良一，小池政美，田畑辰雄

5．　本報告書の編集は主として，伊那市教育委員会があった。

目　　次

序

凡　　例……5

目　　次……6

挿図目次……7

図版目次……7

第Ⅰ章　発掘調査の経過……8～10

第１節　発掘調査の経緯……8

第２節　調査の組織……8～9

第３節　発掘日誌……9～10

第Ⅱ章　遺　　構……11～13

第１節　住　居　址……11～13

第Ⅲ章　遺　　物……14～16

第１節　第１号住居址出土土器……14～15

第２節　第２号住居址出土土器……15～16

第Ⅳ章　ま　と　め……16

挿　図　目　次

第１図　　春富地区遺跡分布図……3

第２図　　地　形　図……4

第３図　　遺構配置図……11

第４図　　第１号住居址実測図……12

第５図　　第１号住居址カマド断面図……12

第６図　　第２号住居址実測図……13

第７図　　遺物実測図……14

第８図　　遺物実測図……15

図　版　目　次

図版１　　遺　跡　全　景

図版２　　遺　　構

図版３　　遺　　構

第Ⅰ章　発掘調査の経過

第1節　発掘調査の経緯

富県地区の県営圃場整備事業は，昭和48年度，桜井地区に於いて最初に着手され，昭和49年度には貝沼地区で行なわれました。幸いにも両地区には指定された遺跡は存在しませんでした。昭和51年の事業地区には小御堂遺跡が該当しましたので，工事着工以前に調査にかかる運びとなりました。

発掘調査地区は水田地帯であったが，夏場施行であったために，収穫等の問題でトラブルがなく調査は割合に順調に行なわれ，着手は9月上旬秋風が吹きはじめる頃に実施されました。小御堂遺跡の調査を委託された場合は，受託されるよう県教育委員会より市教育委員会へ連絡があり，おって南信土地改良事務所より，緊急発掘調査について委託した旨，市教育委員会へ依頼を受けたので市教育委員会を中心にして，小御堂遺跡発掘調査会を結成し，この中に調査団を含めて業務を遂行することとした。

南信土地改良事務所長と市長との間で，「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を締結し，契約後，ただちに発掘準備にとりかかった。

第2節　調査の組織

小御堂遺跡発掘調査会

○調査委員会

委員長	松沢　一美	伊那市教育委員会教育長
副委員長	福沢総一郎	伊那市文化財審議委員会委員長
委員	坂井　喜夫	伊那市教育委員長
〃	向山　雅重	長野県文化財専門委員
〃	木下　　衛	上伊那教育会会長
〃	原　　益久	南信土地改良事務所長
〃	辰野　伝衛	伊那市文化財審議委員
調査事務局	竹松　英夫	伊那市教育委員会社会教育課長
〃	有賀　　武	〃　課長補佐
〃	白石　利彦	〃　係長
〃	三沢真知子	〃　書記

○発掘調査団

団長	友野　良一	日本考古学協会会員
副団長	根津　清志	長野県考古学会会員
〃	御子柴泰正	〃

調　査　員	小池　政美	長野県考古学会会員
〃	田畑　辰雄	〃
〃	福沢　幸一	〃
〃	辰野　伝衛	〃
〃	赤羽　義洋	国学院大学学生
〃	荻原　　茂	東京薬科大学学生

第3節　発掘日誌

昭和51年9月1日　本日より発掘地区の小御堂遺跡にとりかかる。発掘場所は，現在，無住となり，したがってくずれかけた御堂の南東の場所である。午前中は，当地の近くにテントを設営するテントは全部で2張作り，1張りは休憩用に，1張りは道具小屋用にする。午後，発掘地区に南信土地改良事務所へ依頼しておいたブルドーザーが来て，耕土剝ぎを実施する。これが終了後，ただちにグリット設定にとりかかる。グリットの名称は南北1～15，東西にA～Oとし，一辺を2m×2m，面積を4m^{2}と決めた。

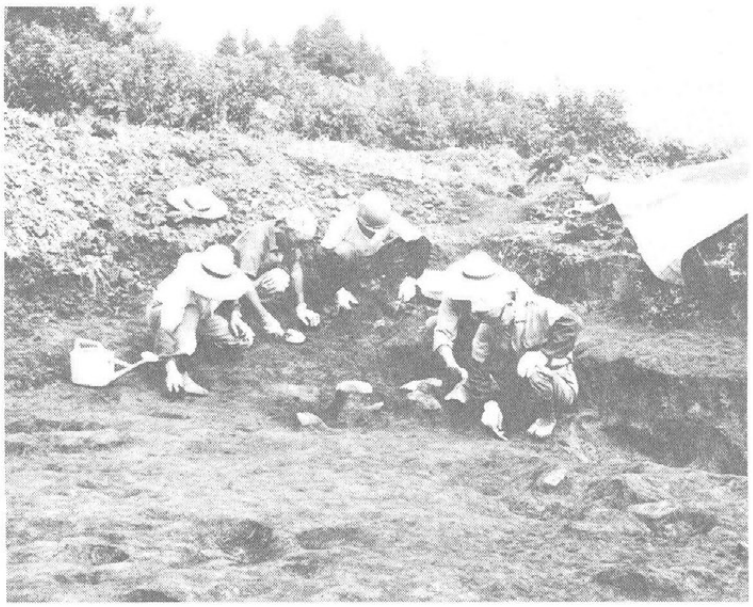
昭和51年9月2日　本日より本格的な発掘調査にとりかかった。まずA1，C1，E1，G1，I1，K1，M1，O1の8グリットをあけてみると，ローム層面までは約40cm位と割合に浅かった。おそらく，水田造成のおりの耕作土の移動がかなりあったものと思われた。一日中かかって8グリットの掘りあげを完了する。遺物はかなりの量は出土したが，全て破片であった。遺構の存在は全くないようなかっこうであった。

昭和51年9月3日

本日は昨日に引き続いてグリット掘りを南側へと進めて3ラインの8カ所のグリットを掘り進めていく。一日中掘ってみた。結果は昨日とほぼ同様であった。

昭和51年9月4日

昨日，一昨日と遺構らしきものは発見されなかったので，今日は遺構をみつけようと調査員や作業員達はみな張り切っていた。



発　掘　風　景

作業内容はグリット掘りを南へ南へと進めていくことであった。本日は5ラインの8カ所を掘り進めてみるが，一日中かかって8カ所のグリットを掘ってみるが，結果は昨日，一昨日とほぼ同様であり，皆んなあせりの色が出てきた。

昭和51年9月5日　本日も同様にグリット掘りを南へ南へと進めていく。もう，本日は遺物の出土がかなりあったので，どこかに遺構は確実にあるものと心に決めて調査にとりかかった。本日はおもい切って7ラインと9ラインの2本のグリットをあけてみることにして，仕事を進めていくと，まず最近にB9グリットに落ち込みがあり，つづいて，Eグリットに落ち込みがみられた。ついに，さがし求めていたものを発見した。何んとも表現しようのない心地がしてさわやかなものであった。前者を第1号住居址，後者を第2号住居址と決め，附近を拡張して，プラン確認に全力を注ぎ込む。夕方まで，かかってほぼ両住居址のプラン確認が一段落となった。

昭和51年9月6日　昨日，2軒の住居址が発見されたために作業員一同に朝から活気があって，何かすごいものをみつけたすぞと口ぐちにさけんでいた。両住居址の掘り下げを同時に併行して進めていく，掘り下げて行きだすと，覆土中より土師器，須恵器，灰釉陶器が出土してきて，大般両住居址の時代が明らかとなってきた。

昭和51年9月7日　昨日に引き続いて両住居址を掘り下げていくと，その形が刻一刻と明らかになってきた。カマドも姿をあらわし，時を経るに従って住居址としての体裁を整えてきた。遺物の量は最初に期待していたほど出土しなかった。

昭和51年9月8日　本日は両住居址の仕上げの段階である。第1号住居址を掘り下げていく段階では極めて記しておくべき特徴はみあたらなかったが，第2号住居址は火災にあったとみえて，いたるところに，焼土や炭化物が検出された。

昭和51年9月9日　本日，作業員達を半分づつに分けて，一方では住居址の清掃並びに写真撮影及び実測を手伝せた。一方では残りのグリットを掘らせた。後者の作業状況は遺物の出土量が少なかったので，思ったより作業の進行状況が早くて，夕方までに27グリットを完掘したが，遺構は何も発見されなかった。

昭和51年9月10日　本日をもって，小御堂遺跡発掘を完了した。すぐに，皆んなで発掘器材のあとかなづけをして終了とした。

昭和52年1月　報告書作製に必要な図面の整理及び作製図版の整理及び作製をする。

昭和52年2月　報告書の編集と同書を印刷所へ送る。

（小池政美）

第II章　遺　　構

第1節　住　居　址

第1号住居址（第4図，図版2）

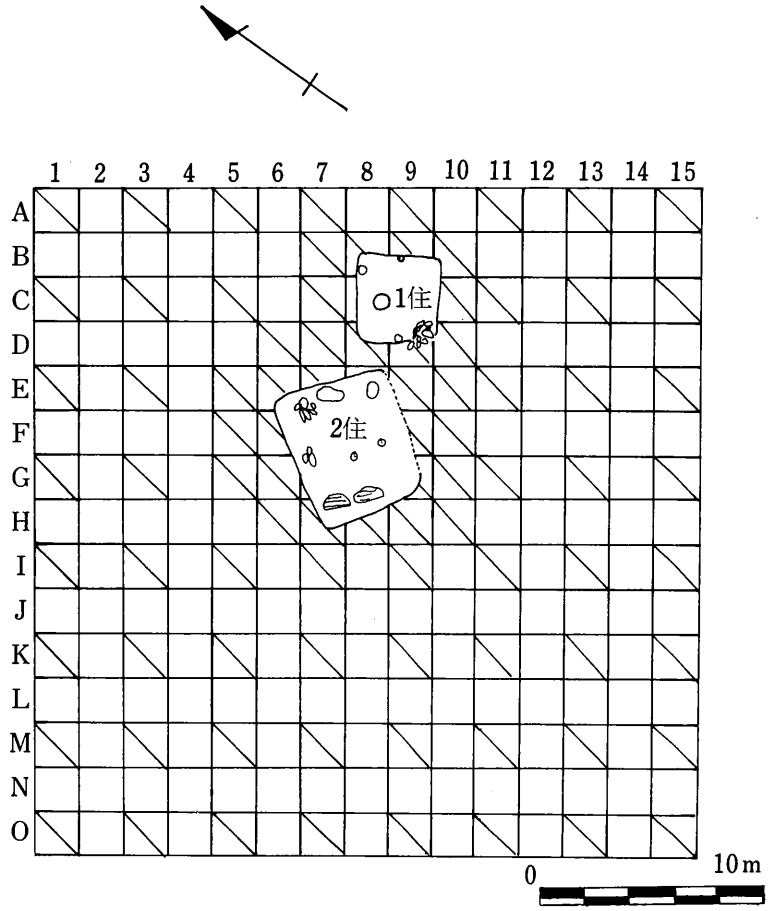
B8～B10，C8～C10，D8～D10の9グリットにまたがって発見された竪穴住居址である。平面プランは方形を呈し，規模は3m88cm×3m70cmを測定できる。壁高は8～12cm位の範囲に含まれている。本址はローム層を掘り込んで構築してあり，覆土はその上層の黒褐色土属が落ち込んでいた。

カマドは西壁の北寄りに，原形はとどめないが，床面を若干掘りほくぼめた痕跡が認められ，焼土も検出され旧カマドと，南壁の東隅に石組粘土カマドがある。新カマドも当住居址は耕作面からほんのわずか下った所で発見され，為に，カマドも耕作によって位置等がズレているものと思われる。

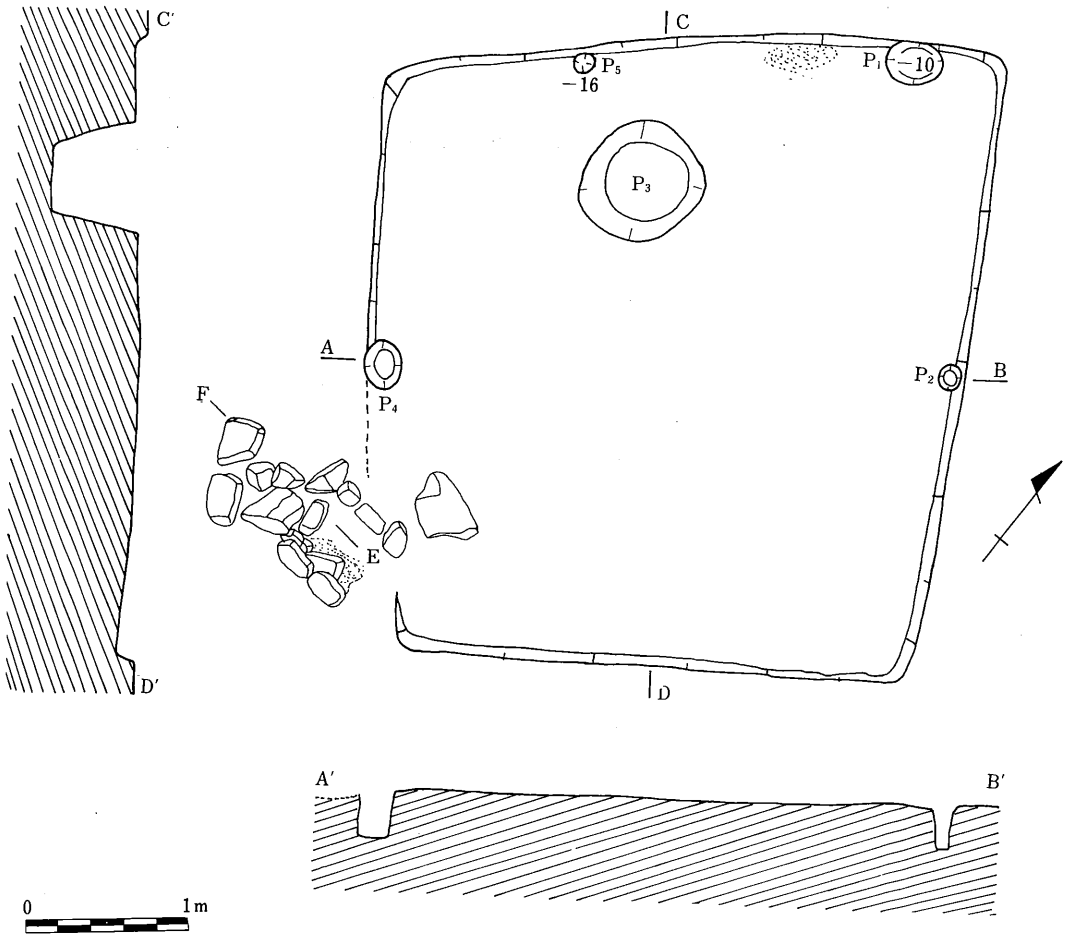
当住居址に附属すると考えられる柱穴は4ケでP_1は34cm×26cm，深さ10cm，P_2は16cm×14cm，P_4は30cm×24cm，P_5は14cm×12cm深さ16cmを計る。

当住居址の遺物は第III章遺物で詳細な説明をするが，その主なものをここに記しておくことにする。それは土師器甕，土師器杯，須恵器杯，須恵器蓋杯，灰釉陶器皿である。これらの出土品より平安時代前半の住居址と思われる。

P_3は78cm×74cmを測定できる。大きさからして住居址内に切り込んだ土拡と思われる。壁は直立し，床面は固く叩いてあり，平坦であった。



第3図　遺構配置図



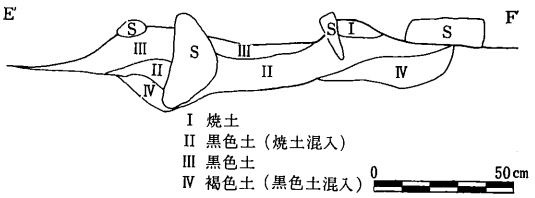
第4図　第1号住居址実測図

第2号住居址（第6図，図版2）

本址は長方形プランを呈する竪穴住居址である。規模は南北6m10cm，東西4m48cmを測定でき，壁高は10cm～14cmを計算できる。東壁の一部は確認できなかった。カマドは北壁西隅に石組粘土カマドがあるが，完全にくずれており，原形はとどめていない。

当住居址は火災にあった住居址と考えられ，床面から10～15cm位上に，焼土と木炭が，多量に検出された。柱穴は2ヶ所確認できたのみで，壁外柱穴などは，検出できなかった。P_1は22cm×24cm，深さ11cm，P_3は60cm×46cm深さ17cmを計り，P_2は土拡で，1m28cm×68cmを計る。

床面は固い叩きで，若干の凹凸があるが良き好，南隅のところで，一部貼床がみられた。壁はやや外傾する。

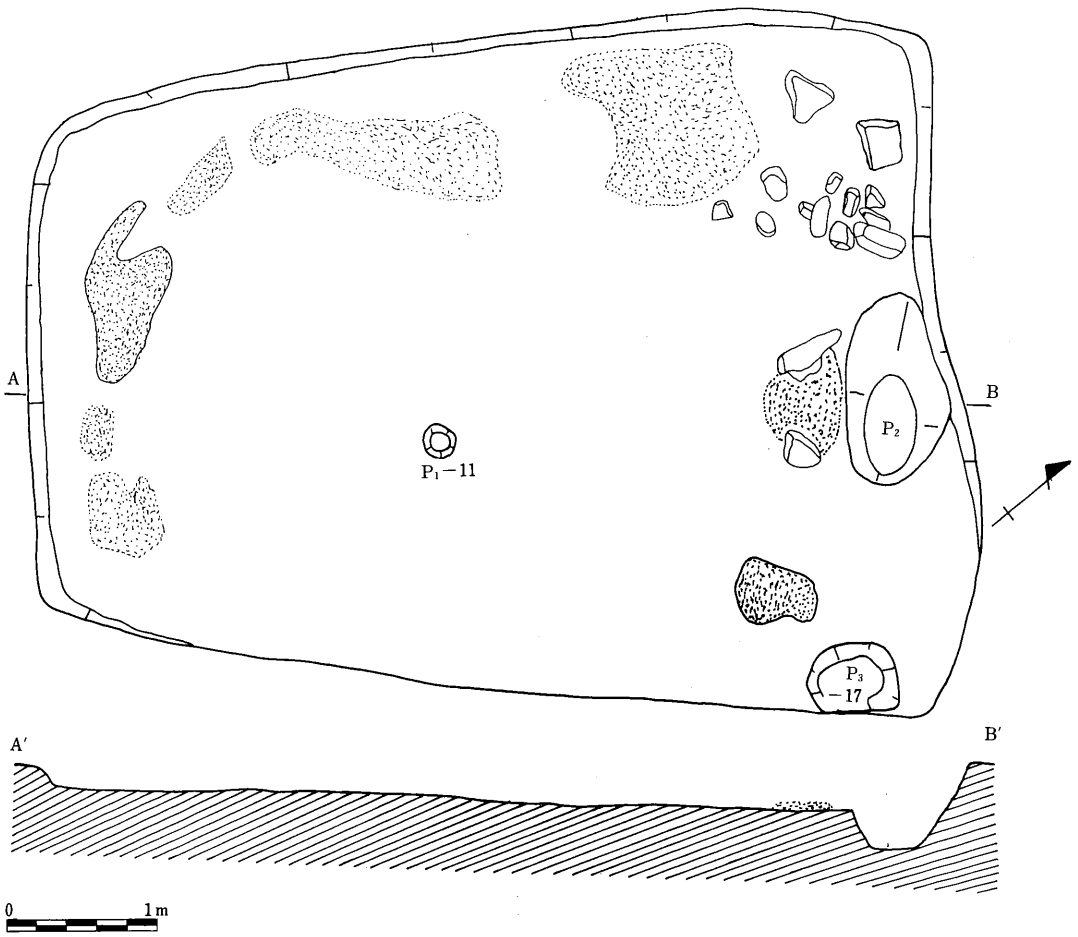


第5図　第1号住居址カマド断面図

住居址北壁中央にもカマド状の遺構が検出されたが，切り合い等は不明。

遺物は土師器甕，土師器杯，灰釉陶器埦，須恵器片等が出土した。これらの遺物から察してみるに本住居址は9世紀後半から10世紀前半にかけてのものである。もっと時代をわかりやすく説明するならば平安時代の前半と考えてよかろう。

第1号住居址と第2号住居址は大般同一年代の住居址と考えられ，もう少し広い面積を発掘したならば数多くの住居址が発見されたものと思われる。（田畑辰雄）



第6図　第2号住居址実測図

第Ⅲ章　遺　　物

第１節　第１号住居址出土土器

土師器，須恵器，灰釉陶器が出土している。土師器の甕は長胴のものが多いようで，太い，粗いカキ目，細いカキ目痕を有するもの，杯は内黒のものが主体である。須恵器では，甕の胴部片，壺の底部片，坏，蓋坏などが出土，土師器に比べ出土量は少ない。灰釉陶器は皿が出土している。

土師器甕（第７図，（１））

外面黒褐色，内面茶褐色を呈し，小石粒，雲母を含む粗雑な胎土をもつ，整形技法は口縁から頸部上まで横ナデ，頸部から胴部にかけて，太く粗いカキ目が縦方向に施されている。内面は口縁から頸部にかけて横ナデ，以下はめだった整形はおこなわれていない。口径 28.1cm を計る。

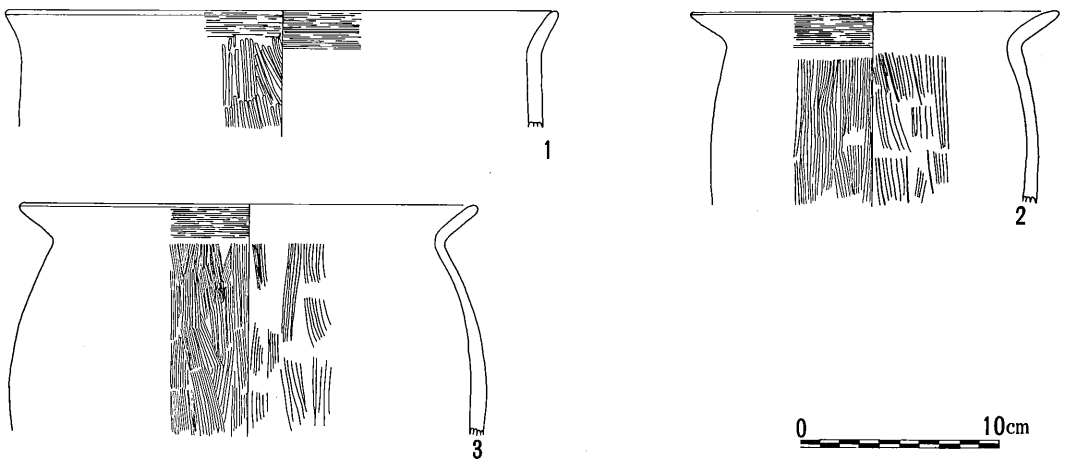
土師器杯（第８図，（1～3））

（1～3）はともに内面黒色であり，口縁は外反し，（1～2）は胴部に丸味をもつ。１は外面の色調は灰茶褐色，一部黒色を呈する。小石粒を含む胎土をもち，内面は若干の研磨がみられる。底部は糸切り，口径 13.6cm，底径 6.4cm，器高 4.1cm を計る。２は外面茶褐色を呈し，小石粒，雲母を含む，内面は研磨されておらず，少し荒れている。口径 11.5cm。

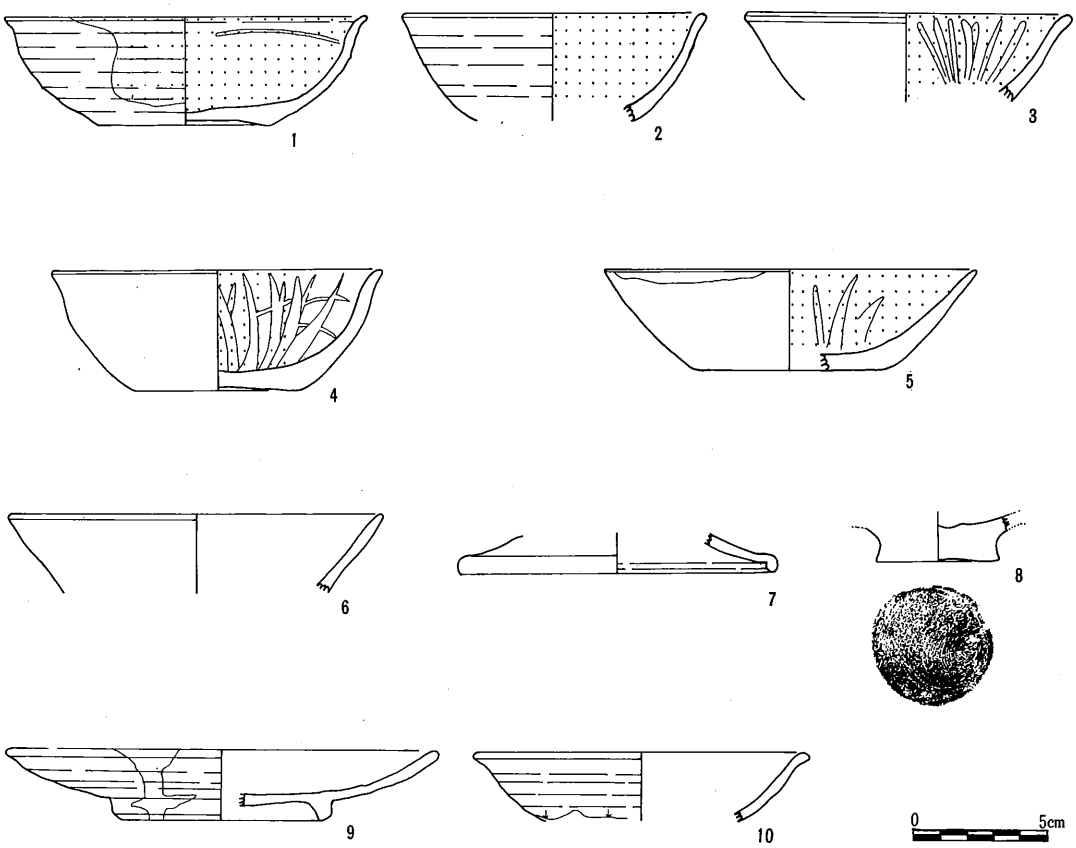
３は外面灰褐色，小石粒を含む胎土をもち，口径 2.3cm，内面は石磨されており暗文がはいっている。

須恵器杯（第８図，（６））

６は外面暗青灰白色，内面灰白色を呈し，小石粒少量を含む胎土をもつ，口縁は直にのび，口径 14.1cm を計る。



第７図　遺物実測図



第8図　遺物実測図

須恵器蓋杯（第8図(7)）

7は内外面ともに青灰白を呈し，口径11.8cmを計る蓋である。

灰釉陶器皿（第8図（9））

9は灰釉で，口径16.4cm，底径7.4cm，器高2.7cmを計る。

第2節　第2号住居址出土土器

土師器，須恵器，灰釉陶器が出土している。土師器の甕は，やや粗めのカキ目痕のあるものが多く，杯は内面黒色のものが多い。須恵器は破片が少量，甕，杯などが出土，灰釉陶器も少量伴なっている。

土師器甕（第7図（2～3））

2は外面暗黒褐色土，内面暗灰褐色を呈し，雲母少量，小石粒を含み，粗雑な胎土である。整形技法は，外面，口縁部は横ナデ，頸部以下胴部にかけては内外面ともに，やや粗目のくし状工具による縦方向のカキ目が施されている。外面に比べ，内面のカキ目痕の方が粗い。口径18.7cm。

3の色調は外面明淡褐色，内面黒褐色を呈し，小石粒，雲母を含む粗雑な胎土をもっている。外面口縁部横ナデ，頸部以下胴部にかけて，やや荒めのくし状工具による縦方向のカキ目，内面も外面より雑ではあるが，同様の整形がみられる。口径23.3cm。

土師器杯（第8図（5，8））

内面黒色で，やや研磨されており，暗文のあるもので，外面は灰褐色を呈する。口縁は直にのび胴部の丸味もさほどでない。

8は灰褐色を呈す小型の杯で，小石粒，雲母を含み，底部糸切りで，底部が高台のごとくに，厚く出張っている。5は口径14.0cm，底径7.0cm，器高3.9cm，8は底径4.7cmを計る。

灰釉陶器埦（第8図)10））

10は灰釉陶器の埦で，口径12.7cmを計る。（田畑辰雄）

第Ⅳ章　ま　と　め

本遺跡は，根本谷中畑遺跡の西方約1km程のところに位置しており，発掘地点より東の地帯は，耕土下に砂礫層が厚く堆積する一帯であり，南・北の一帯は沼地となっている。南には沢が一本流れており，住居址はこの沢近くから発見された。

本遺跡からは2軒の住居址が検出されたが，耕作面からわずか下った位置であり，その保存状態は良好ではなかった。

灰釉陶器は見散される程度ではあるが，皿・埦が出土しており，黒笹90号窯期に比定しうるものである。

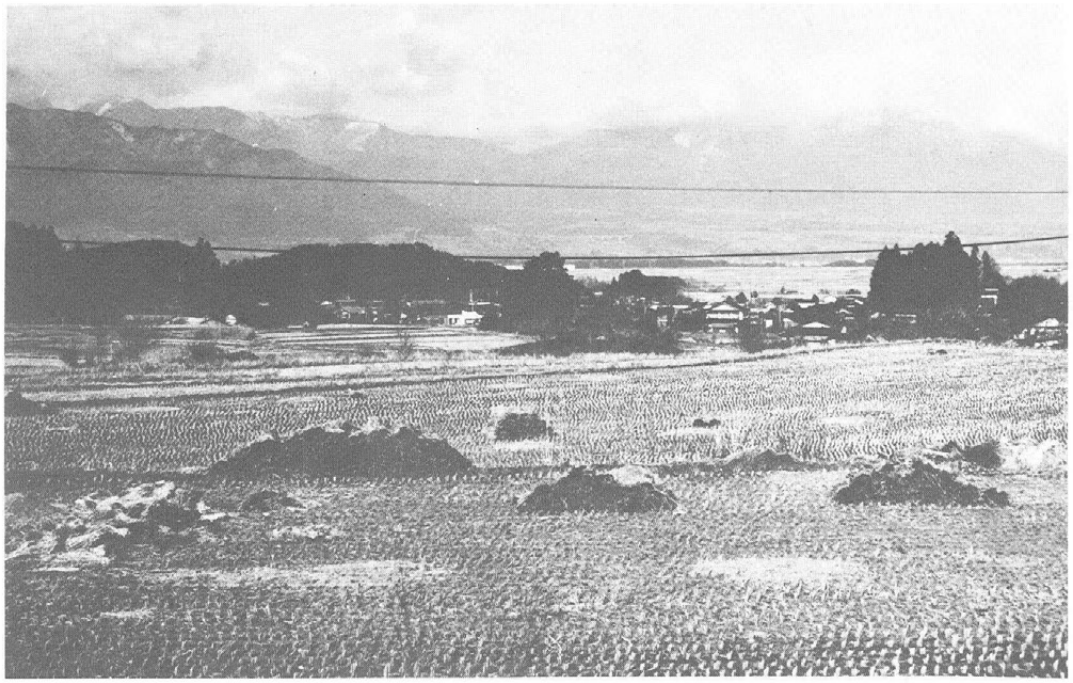
須恵器についてみると，坏・蓋は，端部が急角度で折れる器高の高いものと思われるものが出土しており，新しいタイプのものである。坏は，ロクロによる整形痕があまり目立たないものであり，胎土も粗雑なものが多く目についた，他に，甕・壺等の胴部片も出土している。

土師器は，甕，坏が出土しており，甕は長胴のものが多く，その整形は，胴部にカキ目痕を有するものが圧倒的に多い。また，そのカキ目は胴内面でも同様にみられるが，外面のカキ目よりは粗く，丁寧ではない。坏は他のものに比べて，量的には一番多く出土されており，その形状は埦に近く，内面黒色で，研磨され，底部は糸切のものが多くみうけられる。内面があまり研磨されておらず，がさついた胎土のものも見散された。

第8図－8は，底部が高台のごとくに厚く張出し，糸切，色調は灰褐色を呈す特長のある器形をしており，カワラケの祖形かとも考えられるが，資料の増加を待って，検討を後にゆずりたい。

以上出土遺物から検討してみたが，これらの遺物は10世紀後半から11世紀頃にかけての時期に比定できるものと考える。（田畑辰雄）

図　　版



遺跡地を東側より眺む

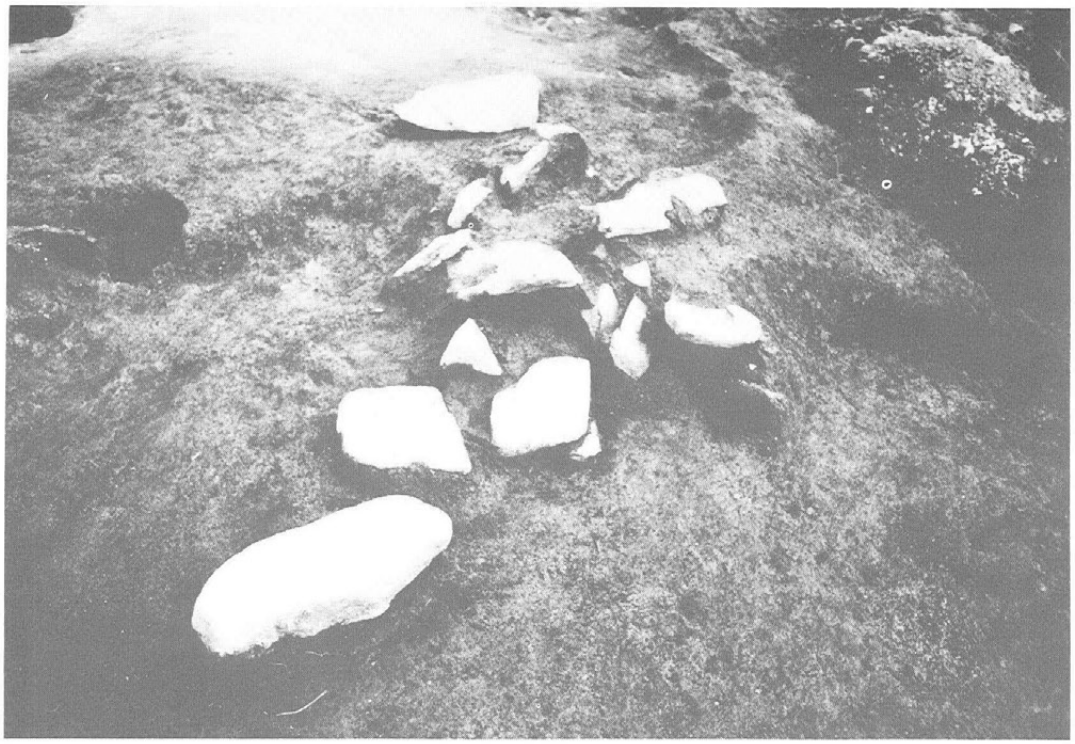
遺跡地を南側より眺む

図版１　遺跡全景

第 1 号住居址

第 2 号住居址

図版 2　遺　　構



第1号住居址カマド

第2号住居址カマド

図版3　遺　　構

小御堂遺跡緊急発掘調査報告書

昭和52年3月15日　印刷
昭和52年3月18日　発行

発行者　伊那市教育委員会

印刷所　岡谷市川岸108

中央印刷株式会社